

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

慈悲こそ命

大慈通元大和尚さまのお徳を慕い(前編)

大本山永平寺副監院
栃木県明林寺住職

西 田 正 法

お暑い中、こうしてお時間を頂戴致しますこと、真に恐縮です。

先ず最初にお詫びを申し上げなければなりません。金岡潔宗方丈様にこの度のお役を仰せつかりましたが、只今もこの本堂内には、私などよりお導師をお勤め頂くに相応しい諸大徳がたくさんいらっしゃいます。潔宗方丈さまからお話を頂いた時には、余りにも予想外な事に驚き、微塵の迷いも無く「通元老師に叱られますから」と、お断り致しました。そうしましたら、潔宗方丈さまが「通元老師が喜ばれますから。師匠が喜びますから」と泣きながらおっしゃるの

り難いご配慮に、衷心より御礼申し上げます。

今日は、その銀杏誌に連載して頂きました、通元老師との入院生活の後日談を、紹介させて頂こうと思います。老師の奇しくも四十九日に及んだ入院も終わり、私も瑞應寺僧堂の修行生活に戻りました。通元老師の行者・堂監行を半年程勤め、畑耕作の係である園頭に転役して間もなくの頃だったでしょうか、多分「観音講」だったと思います。その観音講には和敬会や梅花講の皆さんもご参加され、法要後新到の雲水が、自己紹介がてら法話を勤めることになっていました。これまでの観音講で聞いた先輩のお話は、殆ど自己紹介と地元の名物を紹介する程度のことで、五分程度のお話でした。

また、瑞應寺様には通元老師御本葬お逮夜の際に勤めさせて頂きました通夜説法を、門原後堂老師が手間の掛かるテープ起こしや校正の労を負って下さり、貴重な銀杏誌誌面を五回に渉り割いて連載して下さいました。実に勿体なくも有

り難いご配慮に、衷心より御礼申し上げます。

通元老師の存在が親にも勝るものとなり、一方的に親近感を抱くまでになっておりました。そのような心状から「堂監老師が喜んで下さるよう全力で法話をしよう」ともって有り体に言えば「褒めて貰えるように頑張ろう」と思ったのです。修行生活に入る前、曹洞宗教化研修所で布教教化を学び、その課程の中で毎月五箇所の老人ホームで法話実習の経験を三年間積んでおりましたので「褒めて貰えるように」と言うのは、まんざら根拠の無い自信ではなかったのです。

そして当日、持てる力を出し切り四十分のお話をさせて頂きました。まあ、我ながら良い出来でした。最初に、檜崎一光堂長老師がご講評下さいました。「いやー、驚いたな。雲水がここまで話すとは、つい聞き入って仕舞った。良い話だった」と。続いて林孝典後堂老師です。「方丈さんもおっしゃったが、雲水が四十分も話をするとは思わなかった。*大慈さん、あなたが四十分も話すから僕が話をする時間が無くなった」このおっしゃって、ニコニコと笑顔を向けて下さいました。

さあ、いよいよ堂監・通元老師のご講評です。褒めて頂けるつもりで顔に目を向けると、何故か表情が険しいのです。そして、その険しい顔から出たお言葉は、厳しいお叱りでした。

「何だ！今の話は。聴衆の受けを狙いおって、笑わせてみたり、お涙頂戴のようなことを言ったり、あの手この手を使い、慣れたような話をするな!!」認めて貰おう、褒めて貰おう、お前の中に貪りの心が在るからこんな話になる。

媚び諂うのは貪りだ!!媚び諂うような話をするな!!修行僧の話は、法に対して只管真摯で謙虚であれば良いのだ。名利の匂いがプンプンしてお前のお話など聞きとうもない!!とおっしゃって、スツと座を立たれるとさつきとお部屋に戻って仕舞われたのです。

余りの事に、和敬会や梅花講の皆さんは、「かわいそうに」という憐れみの表情で私を見ます。堂長一光老師は「あんな言い方をせんでも」とおっしゃ

りたそうなお顔を向けて座を立たれました。最後に、林孝典後堂老師が「まあまあ、余り落ち込まんようにな」そう慰めのお言葉を掛けて下さり座を立たれました。私はと言うと、正座をした腿の上で拳を握りしめて必死で涙をこらえておりました。「あんなに病院で尽くしたじゃないか」「親以上に思っていたのに」「何で、こんなに大勢の人の前で恥を掻かせるようなこと」そんな思いが脳裡で錯綜していました。

〈後編に続く〉

本欄は、七月三日にお勤め致しました

「大本山永平寺贈西堂 瑞應三十世重中興 大慈通元大和尚大祥忌」にて、導師を勤めて頂きました大本山永平寺副監院 栃木県足利市明林寺住職 西田正法老師が法要後に御挨拶としてお話し下さいました内容を、読み物になるよう改めて頂き、誌面構成の都合上前編と後編に分けて、掲載致します。

※ 林後堂老師の講評の中の「大慈さん」は当時の西田正法老師の呼び名です。

個人事業主にはがんを告知せよ

昭和のがん専門医の箴言

高岩寺 来馬明規

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師・医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

がんは日本人の死因の第一位。二人に一人はがんになり、三人に一人が、がんで亡くなる時代です。標題に示す「不思議な教訓」は、「がん専門医A教授」が門下生の臨床医らに遺した箴言ですが、これを道元禪師の『正法眼蔵随聞記』の一節に繋げていきたいと思います。

A先生は私の恩師の一人です。

昭和・平成の時節にがんの薬物治療で主導的な立場にあった研究者です。クセの強い妙味ある臨床腫瘍医、かつ人情あふれる教育者でもあり、多くの門下生を優秀な臨床医に育て上げました。

「がんを隠した昭和の時代」

まずは私が大病院の病棟で内科医修行を始めた1980年代のお話です。当時の医療は「父権主義」(1)が席捲し、治療が難しいと判断されるがん患者さんに、がんの診断と余命を告知することはほとんどありませんでした。患者の家族には正直に説明し、本人への不告知や治療方針に同意をとりませんが、口裏を合わせた後で、患者本人には事実と異なる診断名が告知されました。そして

「二重告知」に沿った診療が進んでいきました。たとえば、明らかかな肺がんでも「胸に原因不明の影があるので手術して、取り出した組織をよく調べたい。」肝がんなら「診断は血管腫。良性だが破裂の危険があるので手術して強い薬を使う。」というように、巧みに診断をすり替えていました。

その頃にはすでに「患者や家族が十分な説明を受けて納得し、希望する治療を選択する権利」(インフォームドコンセント)の尊重が始まっていましたが、がんに限っては、現在の常識からは信じられないような「不告知の作法」が長年の慣習として定着していました。家族も「隠し通す共演者(共犯者?)」の役割を要求されました。

なぜならば、「あなたはんです」とは「ゆるやかな死亡宣告」を意味したからです。

がんが患者に与える苦しみのは大半は、がんの症状そのものであると知っていることによる苦しみである。

谷川啓司(2)



患者ががん告知で受ける打撃の強さははかりしれません。がん告知が早くから定着していたスウェーデンにおける最近の臨床研究でも、がん告知後一週間以内の自死は12.6倍、心臓血管病死が5.6倍(2012年)という衝撃的な報告があります。(3)

それでも昭和の「父権主義」に抗い、生意気な研修医が正直な告知をしようとすれば、上から目線の先輩から「患者が自死したら責任を取れるのか?」という反論の難しい指摘が飛んできました。臨床心理学に基づいたきめ細かい精神的なケアも進歩しておらず、ななか、「患者の自死回避・余命尊重」などと言い訳し、医療者が「がん告知の重圧」から逃げていた面がありました。

「がん告知の変遷」

我が国における「がん告知率」の年次推移は統計学的に正確な追跡ができていませんが、

① 健診・診断・治療の進歩による救命率の向上



「個人事業主にはがんを告知せよ」さて、標題の不思議な言葉の裏には、昭和の時代における「A先生のがん不告知による大失敗」

② 心理ケアの向上による、より良い患者支援

③ 告知を求める判例と法制整備

④ 人気芸能人のがん闘病公表などが世論を転換し、単調増加が続いています。1980年代は13~18%でしたが、2002年には「病名を知る権利」が最高裁で示され、2007年のがん対策基本法が成立してからは70%を超え、2016年の国立がんセンターの統計では94%に達しています。(左グラフ参照(4))

がありました。ある時、若かりしA先生が担当した患者は町工場の社長さん、中年の個人事業主でした。社長さんは体調を崩し、

休みがちとなって仕事の業績も傾きはじめていました。周囲に諭されてA先生の外来に行きました。検査の結果、根治できない進行がんとわかりました。

先生は当時の慣習に基づき、がんの診断と推定余命は家族にのみ告知し、社長さん本人には良性の病気の名を告げました。ところが社長さんは、自分の病気ががんでないなら回復可能であると信じ、家族の反対を押し切り、業績挽回を狙って大きな投資と事業拡大を始めてしまったのです。

しかし、A先生の診断に違ふことなく、社長さんはほどなくして逝去。工場は家族が承継できずに倒産。恐れずにがんを告知していれば、回避できたかもしれない大きな負債を相続した家族は、大黒柱を失った悲しみのみならず、経済的にも追い詰められ路頭に迷う事態となっていました。

民事の視点からは医療業務上の「悪結果の予知と回避」という義務を全うできなかった過失が論点となるでしょう。とはいえ、「がん告知はしない」という当時の慣習を頑なに守ったがために、全く同じ病気であっても「大企業

のサラリーマンなら起こりえない悲劇」が個人事業主の家族におきてしまったのです。

「個人事業主にはがんを告知せよ」とは「がん告知の是非は、患者の社会的背景、性格や意向を知り、患者家族ともよく相談したうえで判断しない。患者や家族のためになるなら、必ずしも（当時の不告知の）慣習に従わなくてもよい。そして告げた後もしっかり見守りなさい。」というほどの意味ですが、さらに言えば「医師の言動は患者のみならず、とりま

人々の命や運命をも左右することを思い知れ」、逆に「二人を助ければ、周囲のたくさんの人をも助ける」ということまで示唆する箴言なのです。

【利あるべければ言ふべし】
道元禪師の生の声を孤雲懷奘（くうんわいさう）が聞き書きし、後世に編纂された『正法眼蔵随聞記』にこんな一節があります。

学道の人、言を出ださんとせん時は、三度顧みて(5) 自利他の為に利あるべければ是を言ふべし、利なからん時は止まるべし。

『正法眼蔵随聞記』第六の三

【私訊】

仏道を学ぶ人は、発言の前によくよく熟慮熟考し、自分のためにも相手のためにもなる

ようならばこれを言い、そうでなければ思いとどまりなさい。

これは僧侶への説示ですが、大手出版社の社名にもなった『論語』の一節「吾れ日に三たび吾が身を省みる」(5)を基にしているように想像されます。

しかし、道元禪師は「反省をくり返す」ことよりも「言葉が発する瞬間までの判断」を強調されました。「而今」「今を生きる」ことを大切に実践される道元禪師ならではの表現と受けとめられます。

【おわりに】

医師の言葉が患者のみならず周囲の人生をも左右するように、僧侶の言葉も、周囲に波及し、多くの人々を救う可能性を秘めています。右にご紹介した『正法眼蔵随聞記』の数々の説示も、宗侶・信徒らを正しい道に導く言葉に溢れています。

「個人事業主にはがんを告知せよ」とは、「自他を幸福にできると結論したら迷わず言いなさい」と示す道元禪師の説示が、後世のがん専門医によってさらに具体的・反語的に言い換えられた箴言である、と私には受けとめられます。

【附記】

(1) 父権主義（パターンリズム）

がん患者さんに正確な告知をしてこなかった背景にある思想。

強い立場にある医療者が弱い立場の患者に、詳細な説明や同意をとらずに「利益になるだろう」という判断から、医療の内容に介入・干渉すること。

「オレに任せろ、心配すんな！」
現在も患者に認知症や視聴覚・発声に障害があるときに問題となります。

(2) 『がんを告知されたら読む本』

谷川啓司 プレジデント社 2015年

(3) がん告知後に自死・心臓血管病による死亡が増える。

(英文の医学論文)
Fang F, et al. N Engl J Med. 366(4):310-8, 2012年.

(4) 第42回がん対策推進協議会資料
岡山大学 藤原俊義 厚労省 平成26年

(5) 「三度かえりみる」
一日三回ではなく、たびたび、何度も・くり返し意です。

テレホン法話（〇八九七）四一〇〇三三

禅のたより



◆ 犬にも仏性は あるのか

禅の修行道場では夏と冬の安居期間に法戦式（公案問答）が行われますが、この問答の有名な話の一つが趙州和尚の「狗子無仏性」の話です。

【あるとき弟子の一人の僧が趙州に、「犬にも仏性があるか、それともないか」と尋ねた。趙州は「無」と答えた】

趙州和尚は「犬の仏性は無」といいました。なぜ、趙州和尚は「無」と答えたかがこの公案を解

く鍵であります。

まず、『涅槃經』には「一切衆生悉有仏性」といい、山川草木・森羅万象には仏の性質（仏性）が宿っていることを示し、大乘仏教の基本理念の一つであります。

質問した僧は「犬にも仏性がある」という返事が返ってくると思ったかもしれない、または何かの意図を酌んで質問したかもしれない。しかし趙州はにべもなく「無」と答えました。

趙州が犬には仏性が無いといった意味は、犬に仏性がないからではなく、業識に囚われて世の中のあるがまま（真実）をあ

るがままに見られない私たち(衆生)は仏になれないという教えであり、または仏教そのものであると言えます。

すべての萬物(一切衆生)は常にあるがままで存在していますが、我らは偏見や色眼鏡をかけて見えています。実際、それは正しいとは言えないことです。

なぜなら、我らが見ているものは、我らの業(過去の身・口・意の行為)と識(行為による認識)の作用による判断と見解をもつて分別したものだからです。

だから、ここで大事なことは、分別心を起こさないことです。

つまり、犬に仏性があるかないかの問題ではないです。自分が観念をもつて事物を見ているか否かを先に観察せよという話です。弟子の質問は、仏性があるか無いかという観念の問題でした。しかし、仏教は観念論ではない具体的な事実を通じてあるがまま(事実)をそのまま観ることです。

それでは、皆さんにもう一度問います。犬にも仏性はありますか？

瑞應寺専門僧堂 知殿補 金 範松
令和六年七月一日〜十日



当山三十世大慈通元大和尚 大祥忌

七月三日(水)、午前十時より当山三十世大慈通元大和尚の大祥忌法要が執り行われた。前日の連夜諷經、当日の献粥諷經は門原後堂が勤められ、正當諷經は、栃木県足利市明林寺住職、西田正法老師導師のもと厳修された。



連夜諷經



正當諷經



正當諷經

筆供養・弁天大祭

七月二十二日(月)(旧暦六月十七日)に毎年恒例の筆供養・弁天大祭が行われた。

当日午后より山門頭広場の筆塚前にて、古筆の焼却供養が行われ、夕刻には、弁天堂にて、弁天大祭が行われた。



弁天大祭

七月の日鑑

一日	祝禱 大慈通元大和尚 大祥忌連夜法要
三日	大慈通元大和尚 大祥忌正當法要
七日	日曜參禪会
九日	參玄会(十一日迄)
十日	恵光忌
十五日	祝禱・略布施
十六日	水施食
十八日	觀音講・勉強会
廿二日	大玄忌
廿五日	筆供養・弁天大祭
廿一日	先住忌 略布施

八月の予定

一日	祝禱
二日	大施食会
七日	住友展臺 楞嚴会滿散 土地堂念誦
八日	小參・人事行礼
十五日	祝禱・略布施
十六日	水施食
十八日	觀音講・勉強会
廿一日	略布施



鐘 声

先月は当山の三十世である嵯峨通元大和尚様の大祥忌があり、多くの御寺院様はじめ通元老師を慕われる一般の方々にも多数お集まり頂きました。

山内の大衆が少なくなり、準備や清掃の進行に少なからず不安はありましたが、多くの元安居者の方々に法要の何日も前からご助力を頂き、皆様のお陰で無事に法要を終えることが出来ました。

初めてお会いした元安居者の方々も多く、通元老師様に結んで頂いたご縁によつてたくさんの方々と親睦を深められたことをありがたく思いました。

日々の暑さも厳しさを増す時節となりましたが、ありがたくご縁に結ばれた方々と協力してこの夏を乗り越えていきたいと思えます。

今夏首座